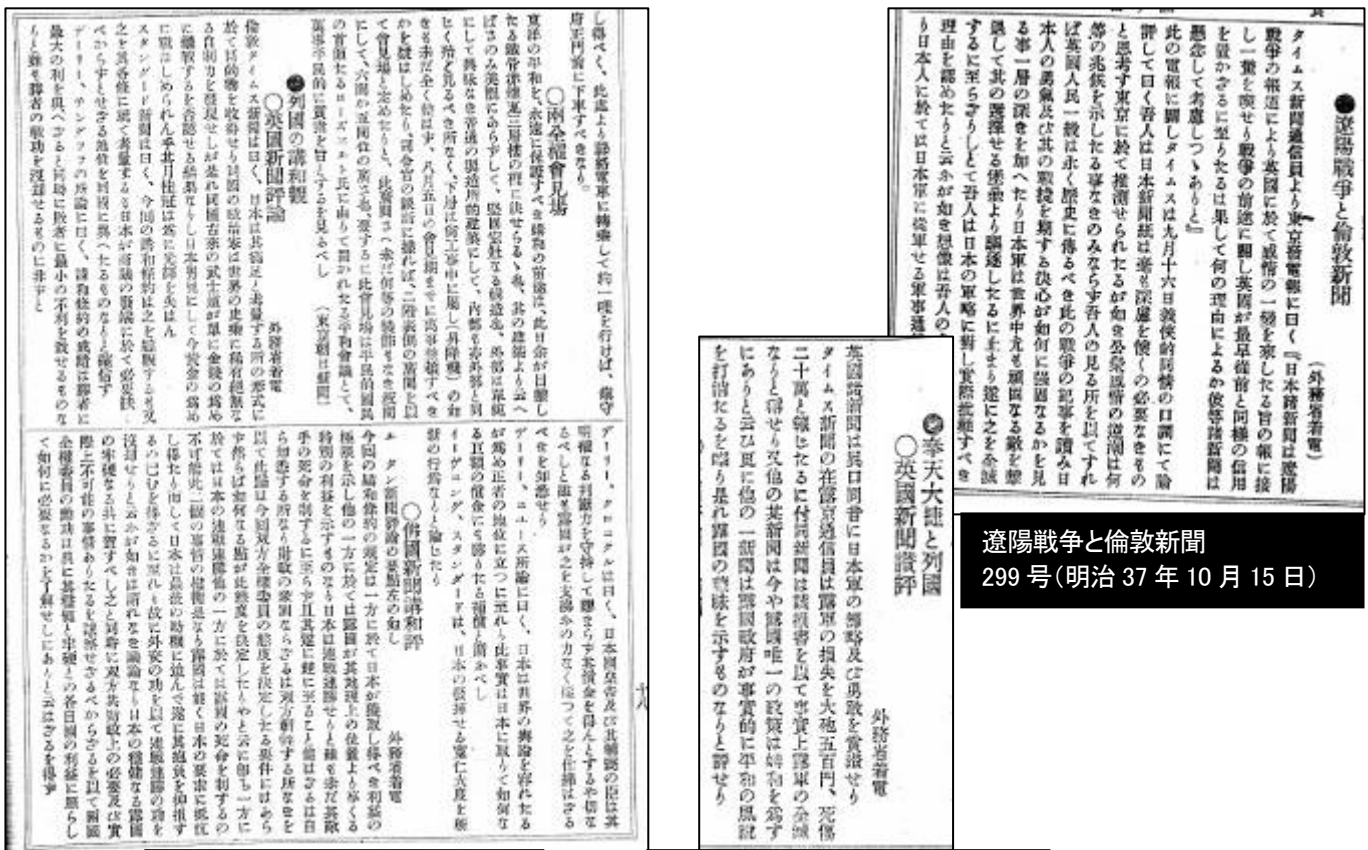


Web版風俗画報は、ジャパンナレッジが提供する電子書籍プラットフォームJKBooks上で、我が国最初のグラフ雑誌「風俗画報」をご提供するデータベースです。1889(明治22)年創刊、518冊からなる「風俗画報」は、我が国最大の風俗研究誌としても知られます。

風俗画報の一番の魅力とは何でしょうか? 「画報」という言葉を日本で初めて使ったというエピソードに象徴されるように、多彩な図版・写真を載せている点が真っ先に思い浮かびます。「イラストレイテッド・ロンドンニュース」に代表される、欧米の出版物に影響を受けた部分もあるかもしれません。本稿では、万国博覧会を例にとり、風俗画報に掲載されている図版を、センゲージ ラーニング社 Gale のデータベースに搭載された欧米の図版資料と比べながらご紹介します。

◆『風俗画報』の中に見える欧米の新聞◆

風俗画報では、欧米の新聞をどのように取り上げているのでしょうか。そこに見えてくるのは、戦争をすることで欧米各国が日本をどう見ているかを気にしている姿です。日露戦争の際に顕著に表れてきます。日本がアジアを越えて世界に進出した、そんな時代なのでしょう。



列国の講和観○英国新聞評論 325号(明治38年9月20日)

奉天大捷と列国○英国新聞講評 313号(明治38年3月25日)

ここではイギリスの新聞の記事を紹介しましたが、他の国の新聞についても載っています。いずれも情報源は外務省からだったようです。この後、発信元に「ロイテル」という表記が見られるようになりますが、これはロイター通信の事のようなのです。

◆風俗画報に見る万国博覧会◆

日本国内の大きなイベントである博覧会については風俗画報でも多数の特集号を出しています。

1. 第3回内国勸業博覧会 1890(明治23)年
2. 第4回内国勸業博覧会(京都博覧会) 1895(明治28)年
3. 第5回内国勸業博覧会 1903(明治36)年
4. 東京勸業博覧会 1907(明治40)年
5. 大正博覧会 1914(大正3)年

これらの博覧会では、数々の欧米からの技術などが紹介されましたが、「博覧会の際に日本で初めて紹介されたもの」も沢山あったようです。それらは当時の日本人たちを驚かせたようで、「風俗画報」でも、その驚きを伝える記事が沢山見ることができます。

◆博覧会に見る電灯◆

電灯に関する記事を紹介しましょう。

一般の人たちが「電灯」を初めて目にしたのは明治15年、その21年後の1903(明治36)年に開催された第5回内国勸業博覧会では、日本で初めての夜間会場が設置され、会場がイルミネーションで装飾されたことが大きな話題になったようです。園内の大噴水も5色の照明でライトアップされました。人々に電気に関する技術の進歩を感じさせたのでは無いでしょうか？



●イルミネーション
博覧会は連日午後五時を以て、各館の入口を開き、各門には守衛ありて、同六時をその門限とし、観覧の客は各館に入るなり。されど日曜日及び大祭日には、観覧の客を許さず、各館の外部を特權し、観覧の入口を許可せり。但し館内は観覧せしめず、外部の社説を見ずし止まれり。日未だ高かるに大庭園より美術館附近に群集して、今かくと待ち受くるものあり、時刻をはかりて、茶屋裏は、人色を辨せざる場を指せる客あり、日全く落ちて、四顧新涼、人色を辨せざる

左：第5回内国勸業博覧会
電灯装飾の図
右：記事 イルミネーション
(第5回内国勸業博覧会図会上編)より

「イルミネーション」という言葉にも欧米の影響が感じられます。日本初の「イルミネーション」は、戦艦の電気装飾をさしていたようで、風俗画報でも、さらに前の号で「電燈艦飾」という言葉に「イルミネーション」というふりがなが振られている記事があります。この博覧会を機に、「イルミネーション」という言葉はもっと幅広い意味で使われるようになったのかもしれない。

四年後の1907(明治40)年に開催された東京勸業博覧会では、更にスケールアップしたイルミネーションを見ることができます。建物に装飾されている電灯の数が多くなっているのが分かりますでしょうか？



○雑観
●夜間開場と新装飾の電燈
●電燈(日本橋より美術館に亘る及五層館電燈二十、三層九一三三十五個) ●日本橋アーチ、電燈(電光二百個) ●正門内花飾アーチ、電燈三百個 ●新月二號即表玉燈光六個 ●春日燈籠(日本橋側)電燈五個 ●花柱一號館内一電燈三層光二百個 ●雲形燈籠(正門内)電燈五個 ●光六十個 ●花垣第一(泰樂堂)三層光電燈五十個 ●花形イルミネーション(淡路院前)電燈五個 ●二百個 ●花垣(貴賓館前)電燈三層光五百個
●五層館の噴泉、夜間開場の爲め、会場内に二百二十個、六十個十八の電燈を埋設し、外に現在六十個なるを八十個増だけ百二十個に改むる事とし、使所の室内燈を五十一、増設し七

〈図〉正門内噴水之光景
(東京勸業博覧会図会第4編)より

記事には使用された電灯の数も載っていますが、かなりの数ですね。四年でここまで技術が進歩したことが窺えます。

この東京勸業博覧会では、夜間会場にとっても力を入れていたようで、夜間会場についての記事が沢山載っています。沢山の建物が電灯で装飾されて光り輝いていたようです。昼間より見物人が多かった様ですね。

光り輝く夜の風景は、明治時代の人々に欧米から伝わった新しい技術のすばらしさや日本が豊かに発展していく様子を感じさせる展示になったのではないのでしょうか。



●夜の山野
夜に入りて、公園の杉林は燈光と輝いて都を飾り、山本橋の大通りは軒並みの提灯に火を入れ三層、懸崖の電燈装飾を施せば東京鐵道會社の裝飾電車も二十臺、櫻の花及び國旗を點せ出して、夜に觀望するも、上野附近は、燈にも輝いて見物人溢るが如く、欄干を覆れて金銀の飾り、また、不夜城の光景、近頃せられたり、池水に映れる燈籠の電燈、立派な燈籠のそれと共に金光の輝きを逆さに照らし、觀月橋の燈光、池上に一文字を讀へたるも美観なり、歩を竹を燈に照せば、正門の電燈として光の宮なり、美術師また飾りたる電燈装飾に包まれて花の如し。

〈図〉三号館附近大藤棚のイルミネーション
(東京勸業博覧会図会 第4編)より

◆博覧会に見る植民地◆

1903(明治 36)年の第 5 回内国勸業博覧会では、初の日本の植民地関連展示である台湾館が設置されました。1895(明治 28)年に日本が台湾を統治し始めてから 9 年が経過し、台湾総督府が新領土である台湾を日本国内に広める目的で設置したようです。

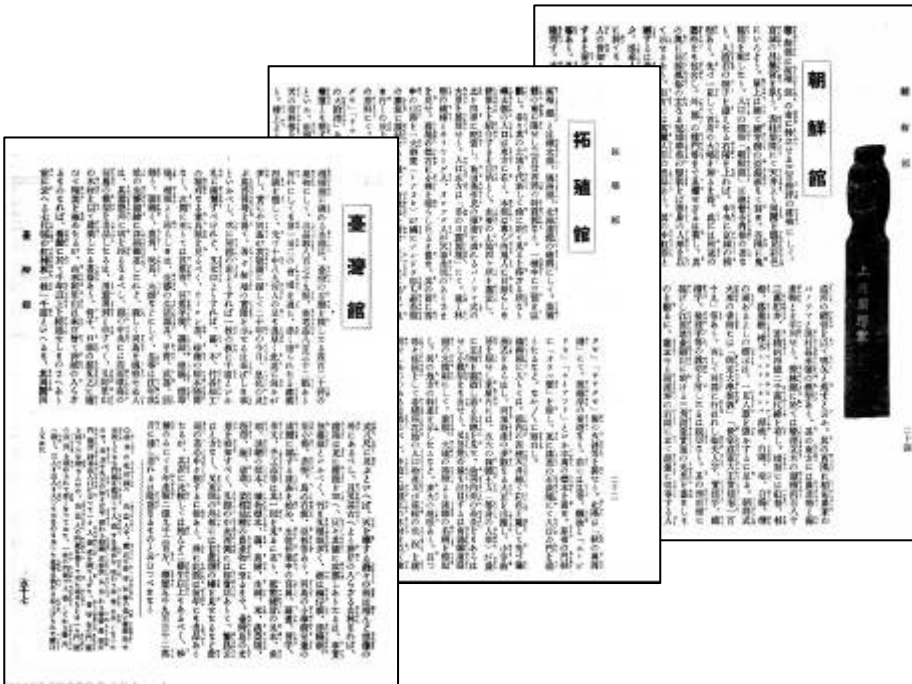
1862 年のロンドン万博視察や 1867 年のパリ万博参加により、欧米の万博での”植民地パビリオン”という展示スタイルに影響を受けたのかもしれない。



●臺灣館
臺灣館は、場中特色のものにして、衆目の最も注目する所なり。因て建設の由來より之を説明すべし。明治二十八年の役名譽の紀念として、臺灣全島の我が國に歸せし以來、九年、郵政の治績歴々として著しく、習俗漸く歐化せられたるに、後、古來同島難治の遺囑として、民衆を教化せしめ、土俗の習俗を改め、神年に至りて、人長擧げて歡呼し、是より幾處の響いて、聲浪に起る。強鳴如吹相聞えて、産業振興の氣運に發せり。是時に當りて内閣勸業博覧會開設の盛舉あり。臺灣總督府は此機に乗じ、臺灣土の風俗文化産業の真用と内外人に示し、大に管内諸般の發達を期し、心と設計に努力し、勞と經營に費し、こゝに始めて本館の設立を見るを得たり。蓋し當初は其の設計を壯大にし、特に一部を建設して、永く此處に保存し、以て臺灣土の繁栄を謀らむとせしむ。財政の許さざるが爲めに、之を得ずして此の如き經營に止めたりといふ。然れども諸般の施設とは大に其節を減らし、各都府の出品を一堂に集め、賣店、飲食店をも同所に設け、方めて新領土の紹介に有效たらしめぬ。

〈図〉台湾館之図の図
(第 5 回内国勸業博覧会図会上編)より

1914(大正3)年の大正博覧会では朝鮮館もお目見えします。韓国併合が1910(明治43)年、その動きを素早く表しています。また、北海道館、満州館、樺太館を総称した拓殖館も設置されました。「内地人に新領土を紹介するため」とはっきり書かれています。

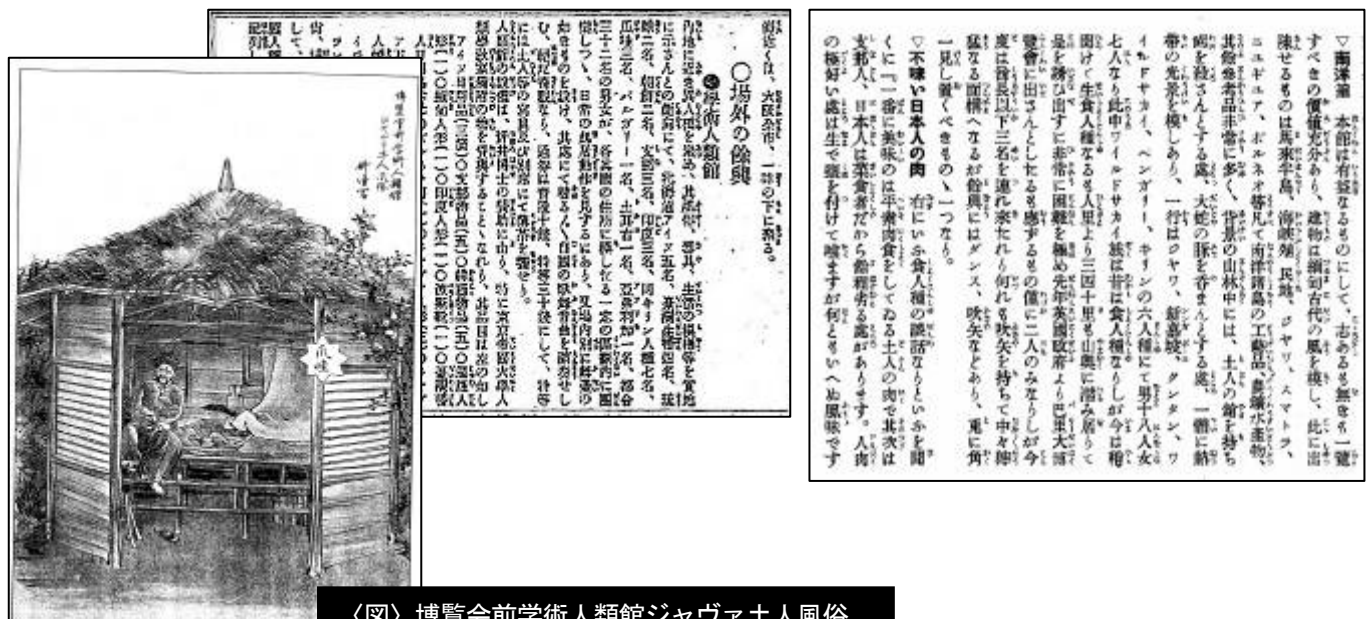


〈図〉台湾館の春雨 (大正博覧会号) より

欧米の博覧会では、植民地の先住民を連れてきて展示しましたが、日本でも同様の例がみられます。

1903(明治36)年に開催された第5回内国勸業博覧会の「学術人類館」では、32名の男女を色々な国から連れてきて、日常生活する様子を展示しました。この展示は後に沖縄と清国から抗議を受けます(学術人類館事件)。

1914(大正3)年の大正博覧会でも、25名の人々を連れてきて「南洋館」で展示を行いました。食人種とされる人の「日本人は菜食者だから味が劣る」という談話も載っています。



〈図〉博覧会前学術人類館ジャヴァ土人風俗 第5回内国勸業博覧会図会下編より

◆博覧会に見る鳥瞰図◆

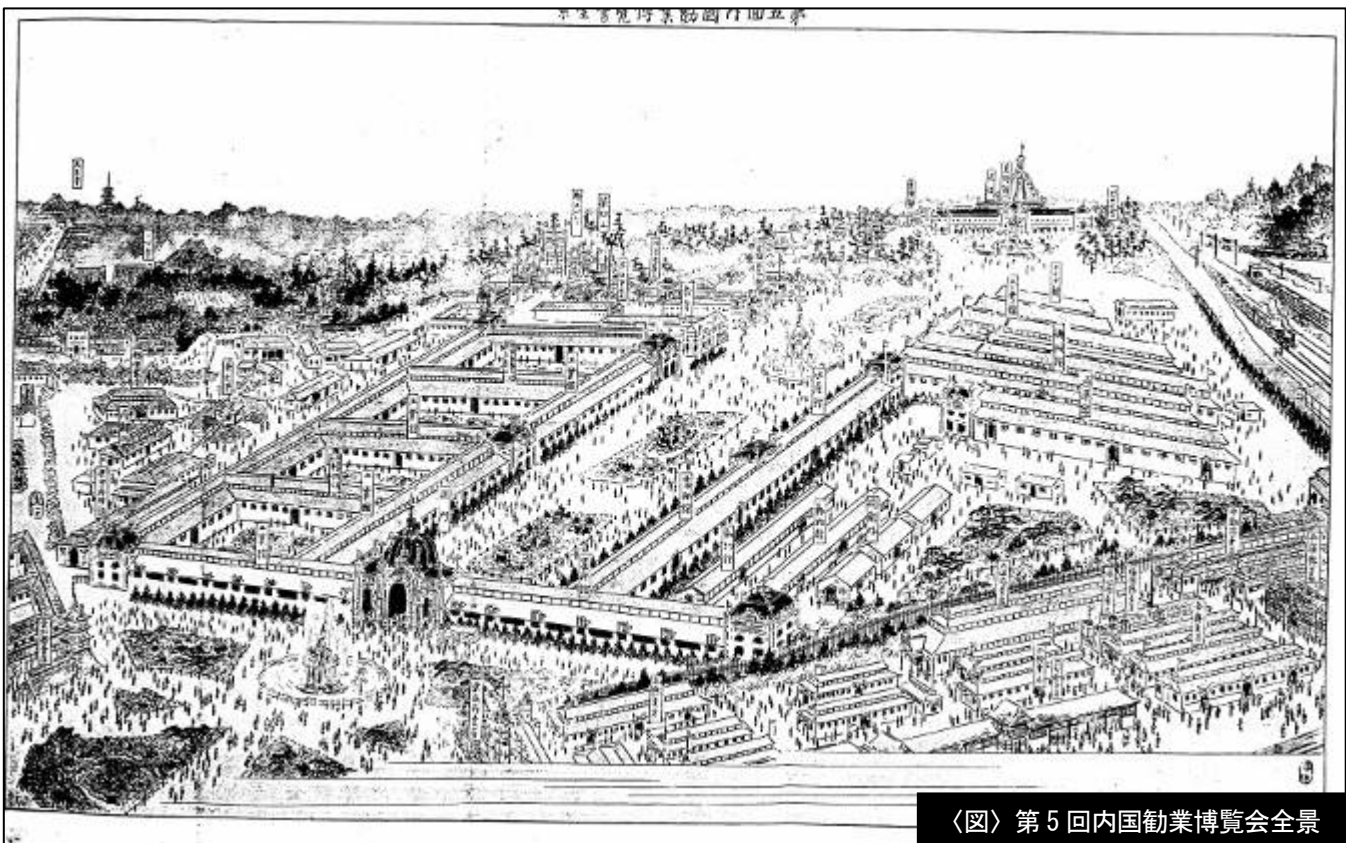
風俗画報は、「東京名所図絵」を別冊として刊行するなど、「江戸名所図絵」にかなり影響を受けているようです。「江戸名所図絵」には鳥瞰図が用いられており、風俗画報にも鳥瞰図が載るのは自然な流れだったのではないのでしょうか。

風俗画報の中では「全景」という言葉が使われています。博覧会の特集号の中でも、京都博覧会、第5回勸業博覧会の会場全体を表す「全景」が見られます。



〈図〉京都博覧会全景図（京都博覧会号より）

大文字焼きまで載っています。



〈図〉第5回内国勸業博覧会全景
（第5回内国勸業博覧会図会上編より）

規模の大きさが伺えますね。各建物の名前も入っています。



〈図〉東京勸業博覧会会場全景
(東京勸業博覧会図会第1編より)

この図はカラーでスケールも大きく、博覧会の規模を感じさせます。池に飛び込むウォーターシュートの存在など新しい技術も見られ、これを見た人々の期待は高まったことでしょう。

左の図は、シカゴ万博の際に作られた鳥瞰図です。上の図とどことなく似通った雰囲気が出てきます。シカゴ万博では日本館も設置されていたため、万博会場の作り方など、影響を受けているのかもしれない。

なお、大正博覧会号など、これ以降の特集号では写真が使われるようになり、このような鳥瞰図は見られなくなります。とても残念です。

今回は「博覧会」を通じて見える欧米の影響について記事を探してみましたが、予想を超える記事と図が見つかりました。また、多数の博覧会特集号を比べることで日本の技術力や国の勢いの変化していく様子もうかがうことができました。

ぜひ「Web版風俗画報」を使っただき、ビジュアルが多数収録された「画報」の「目で見るおもしろさ」を更に感じていただけたらと思います。



センゲージ ラーニング社
Smithsonian Collections Online
World's Fairs and Expositions:
Visions of Tomorrow 所収

掲載商品のすべてのコンテンツと機能をお試しいただける1ヵ月の無料トライアルを受け付けております。

掲載の商品・サービスに関するお申し込み、お問い合わせは、株式会社 紀伊國屋書店 学術情報商品部 電子商品課 (電話:03-6910-0518、ファクス:03-6420-1359、e-mail:online@kinokuniya.co.jp) までお願い致します。

お預かりした個人情報は、弊社規定の「個人情報取扱方針」<http://www.kinokuniya.co.jp/06f/gaiyo6.htm> に則り、取り扱わせて頂きます。